



説教要旨「モーセの挫折」

使徒言行録7章17～36節

イスラエルの民は、エジプトで重労働にあえぐ奴隷として虐待され、しかもそれは過酷を極めたものでした。「神がアブラハムになさった約束」は、このモーセによって実現することになっていました。ファラオの男児殺害命令の中で、奇跡的に救われたモーセは、ファラオの王女に拾われ、イスラエル人でありながら王女の子として育てられました。

当時の先進国エジプトでの最高の教育を受けたモーセは、一方で同胞の苦しみに心を痛めていました。そして、エジプト人が同胞の一人を虐待しているのを見て助け、虐待していたエジプト人を殺してしまったのです。ところが助けたはずの同胞は、「誰がお前を我々の指導者や裁判官にしたのか」(27 節) と言ってモーセを拒絶したのです。

「自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれる」(25 節) と思っていた若きモーセは、自分の力と知恵で民を救おうとして失敗し、さらにはお尋ね者となってエジプトから逃げだします。徹底的に打ちのめされたモーセは、荒れ野で暮らす中で、もはや同胞を救い出すことなど望むことすらなくなっていったのです。

荒れ野で40年過ごしたモーセを、神が召し出そうとされたとき、かつて自信に満ち溢れていたエジプトの王子は、「わたしは何者でしょう」と尻込みし、「誰か他の人を見つけてお遣わしてください」と泣き言をいうほどにまで自信を喪失していました。しかし神は、モーセの中に満ちていた彼の自尊心、自信、誇りが、一度徹底的に打ち砕かれて、神の前に無力なものとしてたったとき初めて、この無力なモーセを働き手として用いられたのです。

無力でも問題ありません。神は必要な力を必要な時に与えることができるからです。大切なことは、自信や自尊心を打ち砕かれて、へりくだる者とされることです。それは、自分の無力を自覚して、だからこそ切実に神の助けにより頼み、神の支えの中で、自分を神の御業のために献げていくことです。神はこのような人をこそ、その御業の働き手として用いられていくのです。